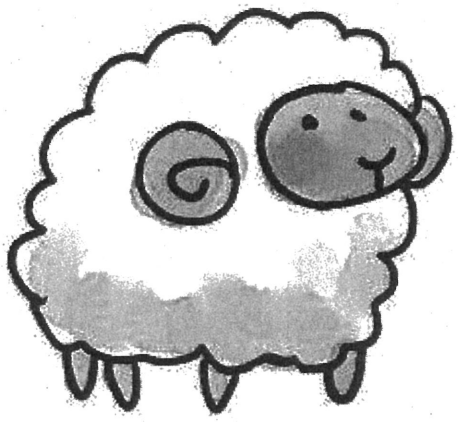
平成２７年度

教育研究所事業報告



四万十町教育研究所

平成２７年度

四万十町教育研究所　　事　業　報　告

目　　次

１．教育研究活動（研究員の調査研究テーマ）
　　特別に支援または配慮を要する児童・生徒への手立てに関する研究
　　～基礎学力の定着を目指して～ …… ｐ 1

２．四万十町教育研究会の運営 …… ｐ 3

３．学校研究支援
　（１）Ｑ－Ｕの取り組み …… ｐ 4

　（２）ドクター（澤田先生）と連携したいのちの学習の取り組み …… ｐ 5

　（３）校内研修支援 …… ｐ 6

　（４）人間関係つくりプログラムの取り組み …… ｐ 7

４．教育支援センターの運営 …… ｐ 8

５．教育相談活動（　教育相談員・ＳＳＷ　） …… ｐ10

６．研究協力校の取り組み …… ｐ12

７．四万十教科書センターの運営 …… ｐ15

８．その他の取り組み
　（１）研修会 …… ｐ16
　（２）所内会・全体会 …… ｐ17
　（３）町内めぐり …… ｐ18
　（４）教育研究所だより「しまんと」 …… ｐ19

１．教育研究活動（研究員の調査研究テーマ）

「特別に支援または配慮を要する児童・生徒への手立てに関する研究」
～基礎学力の定着を目指して～

研究員　　市川　雅美

【テーマ設定の理由】

小規模校の多い本町内でも、特別に支援や配慮を要する児童・生徒がいるのが現状である。基礎学力の定着に課題のある児童・生徒においては、様々な支援を必要としている背景を抱えている場合が少なからずある。しかし、なかなか具体的な支援策が見つからず、模索しながら日々実践を行っている。

すべての児童・生徒がお互いに学び合い、またその現状から教師も学び合うことができるよう校内研やその他の研修会に参加し、少しでも実践に役立てる支援策を研究していきたいと考え、上記のテーマを設定した。

【調査研究の概要】

全国学力・学習状況調査において、特に正答率の低い問題や無解答率の高い問題を中心に分析を行った。町内外の校内研修や公開授業に参加し、子どもへの関わりや手立て、また日常の取り組みを中心に研修した。

「人間関係つくり」や「教育相談講座」に参加し、具体的な事例から学び研修を深めた。

【成果と課題】

成果

・公開授業やその後の事後研修に参加し、自分自身の振り返りをすることができた。特に、特別に支援または配慮を要する児童・生徒に対して具体的に、「この場面ではこういうアプローチの仕方がある」ということを多く学ぶことができた。まさに、ある校内研の中で講師の言った「授業を見せていただいて自分が学べる」である。

例えば英文を書かせる場合、学力差が表れやすい英語においては、苦手な生徒にとって英文を書くことにかなり抵抗を感じることがある。やはりそのような場合には、参考にできるような例文があると生徒は随分安心するし、自分で書いてみようと思えるだろう。大切なことは、この授業で「どんな力をつけたいのか」を教師が明確にしていることであり、そのために行う活動に必ず意図を持っていることである。またある家庭科の授業では、視覚教材を活用し、手元を表示して全体に分かり易く的確に指示を出していた。あいまいな表現が苦手な生徒へも配慮し、基準となる目盛りのついた定規がまな板の上に置かれていたのも印象に残っている。そしてもっとも大切なことは、教師が児童・生徒をしっかりと見て授業を行うことである。今何につまずき、

何に困っているのか。日々の授業や関わりの中での目配り、気配りがユニバーサルデザインの一歩ではないだろうか。

・松井カウンセラーの「人間関係つくり」プログラムや「教育相談講座」を受講し、様々な角度から子どもたちを見ていくことの大切さを改めて考えさせられた。Q-Uは「チーム支援のためにやる、チーム支援のために使う」、や「優先順位をつけまずは１つをやる」、など具体的にどう活用し、どう動くべきかを示唆していただいた。このことにより、行動に移すことが明確になり、すぐに実践しようという気持ちになる。この気持ちになるかどうかが、まずは大事なのだと思う。教育相談講座においても、やはり今現場で大切なのは「チーム支援」だと言われていた。多様化には多様化で対応することが必要であり、チーム支援によって引き出しが増えることで児童・生徒へのアプローチの仕方が変わってくる。そのことが結果として対象者に安心を与えることになるのだということを学ぶことができた。

課題

・公開授業や校内研、また研修等に参加し学び習得したことを学校現場に返していくことがほとんどできていない。自分が学んでいくことで精いっぱいであり、現場で日々模索しているであろう先生方への支援ができなかったことが大きな課題である。この先にどのような機会があるのかはまだ不明であるが、必ず何かの形で発信していきたい。

２．四万十町教育研究会の運営

【実施時期】

期　　日	内　　容	備　　考
４月　１日	校長会（説明、理事選出）教頭会（説明、監査委員選出）	改善センター
４月１５日	第１回理事会（部会調整・総会に向けて協議）	改善センター
４月２８日	四万十町教育研究会総会・部会（組織作り）	四万十会館 窪川中学校
５月２６日	第２回理事会（計画書・予算書の内容確認） 第１回役員会（計画書・予算書の具体の説明）	改善センター
６月１８日	第３回理事会（統一日に向けての協議）	改善センター
７月２９日	統一日（教育関係職員研修・各部会）	四万十会館他
９月　２日	第４回理事会（２学期統一日・まとめについて協議）	改善センター
１１月１１日	統一日（研究授業中心）	町内各会場
１月２７日	第５回理事会（提出書類・取組総括について他） （平成２７年度の総括・平成２８年度に向けての協議）	改善センター
２月１８日	第２回役員会（活動報告と意見交換）	役場本庁
３月　７日	監査（補助金実績報告）予定	改善センター

【目的・概要】

四万十町全体の組織「四万十町教育研究会」として新体制が発足し今年は９年目になる。

この研究会は、「四万十町の学校教育振興を図ることを目的とし、四万十町教育委員会指導のもと自主的な運営を図る」ものである。教育研究所は、教職員研修の助成を業務に含む機関としてその運営を支援している。教職員全員が１７部会のいずれかに所属して活動を行っている。４月には総会と各部会研修（組織作りと年間計画など）、夏には教育関係職員研修と各部会研修、１１月には、研究授業中心の部会研修を年間計画にそって活動を行った。

【成果と課題】

９年目となる教育研究会の活動も理事会を中心に運営ができている。理事会以外に持たれる２回の役員会に参加し、部会長を通して部会からの直接の意見を聞くことができた。次年度以降の活動に反映させていきたい。

各部会での活動記録や資料等が、ファイルにまとめられ、教育研究会共有の財産として研究所に保管するようにしている。また、昨年度に引き続き、統一授業日の指導案を研究所に保管し、今後の授業に活用してもらうようにした。各校には単元名と学年を示した一覧を配信するようにしている。部会で購入した書籍等を文書として周知し、活用を促した。部会によっては小中のつなぎ教材を作成し、各小学校で実施、来年度の当初にその内容に即した実力テストを中学校で実施後、結果分析を行っていくという部会もあった。

【今後の取組案】

これからも、部長や部員の意見を教育研究会の運営に活かし、それをもとに、理事会で改善点を考えながら、教育研究会が発展するように取り組みを支援し、四万十町教育研究会事務局として学校教育課と協力していく。

３．学校研究支援

（１）Q-U の取り組み

【実施時期】

期　日	内　容	備　考
４月　１日	校長・教頭合同会で実施のお願い	
４月　９日	各学校の注文書の回収	全小中学校
５・６・７月	全小中学校で１回目実施	全小中学校
９月～１月	全小中学校で２回目実施	全小中学校
２月	希望の学校で３回目実施	希望校のみ（中１、小１）
３月	実績報告・まとめ	

【目的・概要】

Q-U は、「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート」と「いごこちのよいクラスにするためのアンケート」からなり、児童生徒の心を理解するための調査法である。教師が日常観察や面接法によって児童生徒を理解することを補い、児童生徒の個々の状態と学級の状態を理解するための客観的で多面的な資料となりうるものである。主に学級づくりや児童生徒理解、教育実践の効果測定、不登校予防、いじめの発見・予防、学級崩壊の予防において活用され効果が期待できる。

【成果と課題】

本町では Q-U に取り組み始めて９年目を迎え、今年度も全小学校・中学校で実施できた。今年度も昨年度に引き続き、小学校３年生以上を対象に実施した（希望があれば小学校１，２年生も実施することが可能である）。

各校では、それぞれの取り組みがなされている。Q-U の分析や活用について校内で研修会を持ったり、実施データを細かく分析し全職員の資料として活用したり、複数回実施の利点を有効活用する等である。また学校によっては、人間関係つくりプログラムや Q-U 活用の講師として外部講師を招聘し校内研修を行いその診断内容から小中の連携を図っているところもある。人間関係づくりと学習指導の関連性や、教職員それぞれの感覚のみではなく、同じものさしを持って検証していくことの意義が理解されるようになってきている。

教育研究所では、実施データは簡易プロット表を作成して蓄積し、全町の児童生徒の傾向を把握してきている。今後もデータの有効活用を図っていかなければならない。また、今年度は各校で行われている校内研修に参加することができなかったので、来年度は各校に依頼し可能な範囲で参加していきたい。

【今後の取組案】

学級の状態の改善は、基本的には児童生徒一人一人の顔が見える学校内で、学校の特性に応じた効果的な取り組みについての研究をし、全職員によって丁寧な対応をすることが必要である。全町の児童生徒の傾向を把握したデータを参考に、ピンポイントで働きかけていくことも考えられる。

チーム支援の重要性が言われている今だからこそ、学級づくりに関連して、今年度も実施した事業である「人間関係つくりプログラム」（P.7）等の企画もそれらを促進するものと思われるため、引き続き行っていきたい。

また、Q-U 活用は現在年２回（コンピュータ診断を実施しなければ３回）の予算を計上しているが、より細かい変化を見ていくためには回数を増やしたほうがよいのか。そのあたりも各校に問い合わせるなど、より有効に活用できるよう学校との連携も深めていきたい。

（２）ドクター（澤田先生）と連携したいのちの学習の取り組み

【実施内容】

○「いのちの学習」実施校

◆川口保育所　◆認定こども園たのの
◆昭和小学校　◆田野々小学校　◆仁井田小学校
◆興津中学校　◆大正中学校

【目的・概要】

研究所では、いのちの学習に取り組む学校や園に、教材の貸し出しや授業への協力などの支援を行なっている。

いのちの学習の目標は、

①いのちの大切さについて学ぶ。
②友達の気持ちを考えることのできる共感性を育てる。
③このプログラムを通して家族の絆を大切にする心を養う。

である。幼児期・児童期の早い時期にいのちの教育をすることで、いのちに関して関心を持ち、いのちを大切にしていく心を育てていこうとする取り組みである。授業では、子どもたちが、赤ちゃんに触れ合ったり、成長を観察したりする体験的な活動、家族から話を聞いたりする学習を行っている。研究所では、紙芝居や胎児人形、赤ちゃん人形等の貸し出しを中心に行い、日程の都合がついた場合には出来る限り学校に支援に入るようにした。

【成果と課題】

今年度、いのちの学習には、上記の小中学校のうち２校に支援に入ることができた。中には継続して何回か連絡して頂ける学校もあり、徐々にではあるが、いのちの学習を通して各校との連携もできつつある。また、昨年同様、いのちの学習に取り組む学校への教材貸し出しの機会も多かった。

いのちの学習は、町内全部の学校で行われることが理想であるが、まだ一部の学校での実施にとどまっている。このことも課題の一つと考える。今後も研究所は、健康福祉課や澤田医師と協力し、広めていきたい。

【今後の取組案】

いのちの学習をより充実させていくために、健康福祉課とも連携し、各校に活動を啓発していく。

（３）校内研修支援

【実施時期】

米奥小学校	校内研修（公開授業）	1/14
窪川小学校	校内研修（授業研究・公開授業・協議）	5/29　10/26　11/20
十川小学校	校内研修（授業研究・協議・研究発表会）	1/22
昭和小学校	校内研修（公開授業・協議）	10/28
窪川中学校	校内研修（公開授業・協議）	10/9
北ノ川中学校	校内研修（研究授業・協議・講演）	7/9　10/19　10/27　2/3

小学校研究主任会	1/25	越知町立越知小学校
中学校研究主任会	2/9	越知町立越知中学校

【目的・概要】

本町の教育委員会では、校内研修を活性化するために校内研修応援事業を行い、学校独自で使える研修費の配布を行っている。そこで、研究所でも、各学校の校内研修に参加し、研修が活性化するように協力・支援を行った。

基本的には、校内研修を公開している学校を中心に研修会に参加し、ともに研究する仲間の一人として参加する形とした。上記のように町内６校の学校、１１回の校内研修に参加し、共に学ぶことができた。

【成果と課題】

今年度は６校の小中学校の公開校内研修に参加させて頂いた。特に講師を招聘し、授業研究や講演を伴う公開が多かった。また、研究所としても学校とのつながりが強くなり、研究所をより身近なものに感じてもらえるのではないか。せっかく案内をいただいても、他の会と重なっており、参加できない場合もあった。

【今後の取組案】

今後も公開している校内研修にはできるだけ参加させて頂き、学校の状態を知り、それぞれの持つ課題に沿った取り組みができるよう、ともに研究する姿勢で参加していきたい。

（4）人間関係つくりプログラムの取り組み

【実施時期】（土曜日・午前開催）　全講座の講師：松井浩之スクールライフコンサルタント

期　日	内　容	備　考
4月4日	第1回：黄金の3日間（実践編）	
6月13日	第2回：Q-Uコーチング（Q-Uの意味）	
8月27日	第3回：不登校ワークショップ	1日講座
11月7日	第4回：機能するチームと特別支援教育	

【目的・概要】

四万十町では、Q-U に全町で取り組むなどして、子ども達の人間関係つくりに力を入れている。その一環として、よりよい人間関係つくりのサポートを目指して本事業を実施し、今年度で5年目となる。

また、子どもたち同士の人間関係つくりには、まず教職員間の人間関係つくりが不可欠であると思われるため、このプログラムを通じて校内の教職員同士のつながり、また、参加した町内の教職員同士のつながりが深まることもねらいとしている。

一貫した指導を受けるために、全講座、スクールライフコンサルタントの松井浩之氏を講師として招聘した。

【成果と課題】

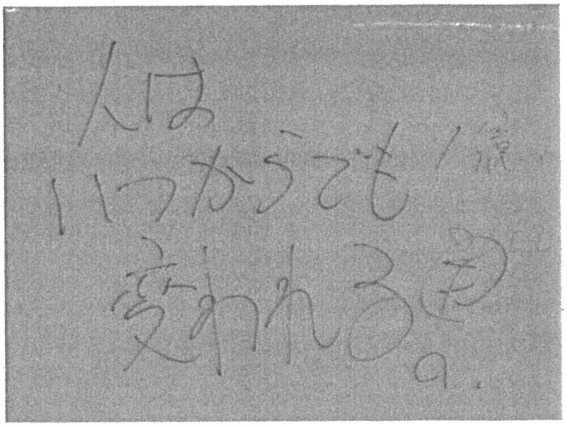
1回の講座の平均参加者数は7名であった。少人数ながらも、小・中学校の担任、養護教諭、町外の教育関係者の参加もあり、幅広い交流で得るものも多かった。今年度は初めて参加された先生方も多く、早速学校に持ち帰り校内で広めていきたい、という声を多くいただいた。毎回、「参加するたびに自分を振り返ったり、確認ができたりして進む方向（進みたい方向）が明らかになります」「今回のQ-Uについてもわかっていてわからないことが多く、今後の生徒との関わり方に大変参考になりました」など新たな知識や気づき、また再確認など参加者からの意欲的な感想が寄せられている。今年度もプログラムを実施後、内容や参加者の感想等をレポートにまとめ、報告できた事も成果としてあげられる。

来年度に向けては、少しでも参加人数を増やすことと新たな学校や先生方の参加に向けて、開催日時やお知らせの方法などを工夫していくことである。

【今後の取組案】

来年度も「人間関係つくり」や「チーム支援」に関する講座を企画する。

実施日に関しては、今年度も休日の土曜日午前中に開催した。部活動等でなかなか日程調整が難しいと思われる中学校教員も、早めの周知で調整をかけて参加していただいた。次年度以降も日程を早めに連絡し、折に触れ情報を発信していきたい。



４．教育支援センターの運営

[目的・概要]

◆心理的・情緒的・身体的理由で不登校状態に陥った児童生徒に対して、相談及び個別指導、集団生活指導を行い、学校生活への復帰及び自立を図ることを目的とする。

◆義務教育終了後、１９歳をめどに進路等が決まっていない者等に対して、相談及び進路情報の提供などを行い、社会への参加及び自立を図ることを目的とする。

◆教育支援センターでは、次の４つを指導目標として揚げ、子どもの成長や課題にあわせて個別に支援を行い、学校復帰を目指す。

（指導目標）

〇こころの安定を図る

・教育支援センターが通室生の居場所となるように支援する

・通室生と指導員とが信頼関係を築いていく

〇規則正しい生活リズムを身につける

・毎日、教育支援センターに通室してくることで生活リズムが作られるように支する

・保護者、担任、指導員などが通室生の生活態度に気をつけていく

〇他人の気持ちを考え、認め合うことができる

・体験活動や行事など様々な場面で人と関わる機会を作っていく

・人と関わったり、繋がったりする楽しさを感じられるように支援する

〇様々な活動を通して自信を持つことができる

・子ども達が得意な活動をみんなで認めていく

・やって出来たことをみんなで振り返る

◆教育支援センターと通室生が所属する学校（以下学校）とで毎月連絡会を開き、子どもへの支援方法の確認、教育支援センターでの様子や通室状況などの報告をする。

「かげつ教室」

今年度は、中学３年生１名・１年生１名の通室生２名がおり、高校生など過年度生への支援も行って来た。３年生については、一学期に３回通室して来たが、二学期からは通室なしの引きこもりの状態である。一週間に一度、金曜日に教育相談員・ＳＳＷ・教育指導員の誰かが家庭訪問をしている。また、１年生については、９：３０～１０：００頃に登校し、１０：００頃から午前中は２時間ぐらい学習し、午後は卓球（バトミントン・テニス）・トランプ・ゲーム・農作業・課外活動等を取り入れていった。二学期の後半は、調子よく安定して通室して来たので、最後の一週間は定時の時間で学校へ行くことが出来た。しかし、冬休みを挟んで、元にもどり最初からやり直しの状況となっている。

「たのの教室」

今年度から開設した「たのの教室」には、小学６年生１名が通室し始めた。一学期の前半、毎週火曜日の開室日には通室できていた。「たのの教室」から給食の時間に

合わせて学校へ行くこともできた。後半から「たのの教室」に来る日が少なくなり、二学期からは通室する事がなくなったため家庭訪問に切り替えた。祖母には、「たのの教室」に来てもらい、児童の様子を伝えてもらっている。

「とおわ教室」

過年度生、一年目のＡ君。４月当初は、母親と一緒に「とおわ教室」にやって来て、昨年からの続きのジクソーパズル等で時間を過ごしていたが、５月頃からは、家での手伝いなどをして、夏には初めてのアルバイトにも行くことが出来た。普段の「とおわ教室」には、Ａ君の母親だけでやって来ることが多く、いろいろな話をしていく中で、やがては高校進学についての希望も持っている。できるだけプレッシャーにならないように、家庭訪問は一ヶ月に１～２回程度と少なくしているが、昨年の秋過ぎあたりからマスクをすることがなくなり、今は素顔のままで話をすることが多くなった。本年度は、サポステとも連携し大きな節目の年となり、次へのステップを大いに期待したい。

[今後の取り組み]

通室生への支援の目的にもあるように、対応の仕方として学校復帰へ繋げる事を目標とする。そのためにどうすればよいのかを考え、学校や関係機関（スクールカウンセラー）等と連携していく。また過年度生についても、休学や退学等になった生徒等について進路先等（サポステ）についての相談等を通して関わっていく。

２０１５年度 教育支援センター研修・行事内容

【 研　修 】

月　　日	内　　容	備　　考
５月　１日	教育支援センター連絡協議会	県教育センター別館
１１日	西の会	須崎市
７月１０日	土佐市教育研究所視察	土佐市
１１月１０日	教育支援センター連絡協議会	県教育センター別館
１月２９日	教育支援センター連絡協議会	〃
２月２３日	西の会	須崎市

※月一回の学校との連絡会。月に一回の研究所全体会。随時、開かれる研究所内会。

【行事内容】

月　　日	内　　容	備　　考
８月２６日	かげつ杯	かげつ教室
１２月　８日	ふるさと学習発表会	きらら大正
２１日	餅つき大会	教育研究所
３月　予定	終了を祝う会	かげつ教室

※通室生の様子などを見ながら、その都度、課外活動も行っている。

５．教育相談活動（教育相談員、ＳＳＷ）

【目的・概要】

学校だけでは対応が困難なケースに対して、主に児童生徒、保護者、学校、地域などからの相談を受け、学校との調整や家庭環境の調整を行う。そして、必要に応じて家庭訪問をし、不登校等の子ども達の支援にあたり、多方面からの支援が必要な場合は関係機関との連携を行い対応する。

また、義務教育終了後、進学も就労もしていない子ども達の自立を目指した支援を教育支援センター、教育相談員、ＳＳＷとで協力しながら行う。

【活動内容】

教育相談員２名、ＳＳＷ２名で、主に窪川地区、大正・十和地区に分けて相談活動を行った。

○　不登校の児童生徒については、学校、教育支援センターと連携し、家庭訪問等を実施した。また、子どもたちの状況により、学校と相談し、教育支援センター「かげつ」「たのの」「とおわ」の各教室の紹介もしてきた。

○　子どもの取り巻く環境に関すること、問題行動などについては、学校を中心として情報収集をし、相談やアドバイスを行い、必要に応じて関係機関と連携を図り対応をした。

○　義務教育終了後の子どもへの支援については、家庭訪問等で関わりながら、進路や就職に向けての相談や情報提供などを行った。今年度 11 月から開設された高知黒潮若者サポートステーションとも情報交換をしながら支援につないでいった。

○　澤田医師による「けんこう相談・ゆっこ」（子どもや保護者へのカウンセリング）は、毎月１回の開催で、保護者からの予約制で行った。

【成果と課題】

不登校のケースについては、学校との定期的な連絡会の中で情報交換をし、具体的な支援方法を協議していくことができた。また、それぞれの教室に登録している児童生徒に対して、所内ミーティングを適宜実施することで、共通認識の元に個々の状態に合わせた支援方法を協議し、取り組むことができた。

その他の問題については、学校、関係機関と情報交換や支援会などを行うことで、状況の悪化を未然に防ぐことも可能となった。

義務教育終了後の子どもへの支援については、自立へ向けて進むことができるよう、家庭訪問、相談などの取り組みを行った。就労や進学への方向へつながった例があるものの、継続が難しい場合がある。また、高知黒潮若者サポートステーションとの連携に

より、家から出にくくなっていた状態からの変化がみられる者もいる。

不登校児童生徒については、一過性で終わり順調に学級に復帰した例もあるものの、なかなか学校復帰へとはつながらず、今年度も課題として残されている。

【今後の取り組みについて】

今後、義務教育中の子どもへの課題がさらに多くなるのではないかと予想される。これからも学校や家庭訪問等で、少しでも課題を抱えている子どもたちとつながる機会を設け、進学や就学に向けてのかかわりと情報提供を行っていきたい。

加えて高知黒潮若者サポートステーションとの連携を図りながら義務教育修了後の子どもたちへの支援にも力を入れていきたい。

また、われわれ関係職員の研修も実施していき、よりよい支援につなげていきたい。

６．研究協力校

【目的・概要】

教育研究所では、四万十町の教育振興及び児童・生徒の基礎学力の向上定着等、健全なる成長のために研究等を行う団体に対して、「研究協力校」として業務を委託している。

今年度は、以下にあげる２校を「研究協力校」として業務を委託した。

学校・団体名	研究業務	会　長
「体力向上」研究会	体育・保健	濵田出水（北ノ川小学校）
「北中授業づくり」研究会	丁寧な授業づくり	宮﨑宏治（北ノ川中学校）

【実施内容】

◎「体力向上」研究会（北ノ川小学校）

研究テーマ	『運動量と学習との相関についての考察』
研究概要	１．万歩計を朝の登校時に全児童に身につけさせ、６月・７月、１０月・１１月、１月の５ヶ月間（各月初め１週間、計５週間分）のデータをとる。 ２．月ごと、学期ごとに集計し、その結果を児童にフィードバックする。 （運動への意欲化をはかり、学習との相乗効果を学級指導していく） ３．運動量の伸びの見られる児童を評価していく。 ４．児童の学習の状況および体力測定結果と運動量との状況を重ね考察する。 ５．早寝・早起き・朝ごはんや学習時間、運動時間等の基本的生活習慣のデータも学期に１度は取り、考察を重ねる。 ６．結果を保護者や地域に知らせ、知徳体のバランスのとれた児童の育成をめざす。
成果と課題	＜成果＞ ・全校児童の通常時の運動量を把握できたこと。 ・シールや表彰状を使って、児童を評価していくことで意欲化につながり、数値が向上することが分かった。 ・運動量と学習状況の相関を見た時、運動量の低い児童に学力不振の児童が　集中していた。運動量の多い児童が全員学力上位者ではないが、そのほとんどの児童の学力が高いことが判明した。以上のことから、本校では運動量と学力はほぼ比例の相関を示している。サンプル数が少ないため、結論付けはできないが、運動量を向上させる取組が、学力の向上に有効な手段と言えるのではないか。 ・学校での１日の平均歩数が 10000 歩以上の児童の体力調査の結果、A 判定の児童が多いことや水上記録会及び陸上記録会で入賞する児童も 8000 歩を超える児童に限られていることから、日頃の運動量が体力と結び付いていることは予想通りであった。 ・運動量の少ない児童は、学習への意欲や集中力に欠ける児童が多く、生活リズ

	ムも整っていない児童が多いことも明らかになったが、生活リズムは家庭の教育力にも左右されるため当てはまらない児童もいる。したがって、生活リズムとの相関については断定や結論付けはできないと考える。 ＜課題＞ ・結果からの帰納法的考察をふまえ、「一定の運動量を確保することが、児童の体力や学力に好影響を及ぼす」という結論である。 ・この研究成果を、校内研で確認するとともに、保護者への啓発の資料とし、運動量を確保できる取り組みにつなげていきたい。また、この結論を演繹的な考察でも実証できるように、継続的な体力づくり（運動量を増やす）や運動好きな児童の育成をめざし具体的な手立てを講じていく。

◎「北中授業づくり」研究会（北ノ川中学校）

研究テーマ	『指導課程におけるユニバーサルデザイン及び生徒指導の３機能の視点を取り入れた授業づくりの研究』
研究概要	１　当該研究の目指すゴール （１）ＵＤ、生徒指導の視点を取り入れた組織的な授業改善と教員の資質・指導力の向上を手段として、個々の生徒の基礎学力の確実な定着と学習意欲等の向上目指す。 （２）学力向上に向け、研究主任を中心とした組織的な研究体制の確立を目指す。 （３）国、県による学力調査を活用した、学力向上の組織的な検証改善サイクルの確立を目指す。 ２　具体的な取組 （１）本校独自の授業スタンダード作成 （２）ＵＤ、生徒指導の３機能等についての研修の実施 （３）授業研の実施 （４）他校の実践から学ぶ（教科・領域・防災） （５）学習意欲向上に向けた補助教材の活用
成果と課題	＜成果＞ 特に成果が見られたこととして以下の５点が揚げられる ・研究主任を中心とした学習部会のメンバーが、互いに授業を見合い、授業後の振り返りを自発的に行ったり、研究授業を行う際は事前に放課後の時間帯に模擬授業を実施するなど、教員発信による組織的な授業改善の動きが学期を追うごとに盛んになってきたこと。 ・各種学力調査を活用した、学力向上に向けた検証改善サイクルの確立についても、教員の意識の高まりとともに、組織的な取組として機能し始めている。 ・５月に作成した「授業スタンダード」は校長のアイデアが色濃く反映されたものであったため、実際の授業で活用されにくいものであった。しかしながら、上記１でも述べたように、管理職から強制されない教員の自発的な授業研究を

	繰り返すことを通じて、今の本校の授業でＵＤ、生徒指導の３機能の内、何を大事にすべきかといった点が整理され、２月に「授業スタンダードＶｅｒ２」が作成できた。 　数多くの授業研を経て教員主導で作成されたＶｅｒ２が今後の授業改善の柱となる。 ・他校の研究発表会や成果報告会に参加することは、教員に校長の示すビジョンを実感してもらううえで大変効果的であった。また、校長自身も他校の実践から自校の実践に取り入れるアイデアを得たり、刺激を受けることができた。 ・生徒向けの教材については、グループ活動用のホワイトボードが有効であった。また、学習意欲づけの一環として全校で取り組んだ「ＮＨＫラジオ英会話　基礎英語１・２」は生徒にも好評で、普段の授業とはひと味違った学習の機会を提供できたものと考える。 ＜課題＞ ◆授業研究から授業改善に結びつくには、教員それぞれの意識が大切であるが、依然温度差がある。 ◆組織の力によって個々の教員レベルでの指導力を向上させる取組を粘り強く進める必要がある。

【成果と課題】

今年度も昨年度に引き続き、「研究協力校」を２校にしぼった。研究所としても校内研修に参加し、授業について学び合えた。研究をともに進める姿勢で情報交換を行う等、研究協力や支援ができた。

【今後の取組案】

来年度も、２校にしぼって「研究協力校」の課題に沿って、できる限り協力しながら進めていきたい。

７．四万十教科書センターの運営

【運営要項】

○設置場所・・・・「四万十町農村環境改善センター」の一室

○開室・休室及び閲覧時間

開室日・・・・・月曜日～金曜日

休室日・・・・・土・日曜日、祝祭日、１２月２８日～１月５日

閲覧時間・・・・午前９時～午後５時

○貸し出し期間・・・１０日間を限度とする

○教科用図書展示会・・・文部科学省の告示により決定

（今年度開催期間：平成２７年６月１９日～７月３日）

【目的・概要】

教育関係者の教科書研究の便宜や一般の方々への情報公開の一環として、平成２４年１月４日より四万十町教育研究所で企画・運営・管理を行っている。

主な業務内容としては、 教科用図書の貸し出しと教科用図書展示会の開催である。今年度も昨年度に引き続き、年度初めの校長・教頭合同会において、研究所の業務の一環として「四万十教科書センター」の運営のことをお知らせした。

また、教科書用展示会は平成２７年６月１９日から２週間開催したが、期間が限られていたこともあってか、外部からの利用者は少なかった。

【成果と課題】

上記でも述べたが、今年度も、年度初めから各校に教科用図書の貸し出しについて周知した。今年度は改訂の時期でもあったことから各小学校、また来年度からの改訂に伴い各中学校からも貸し出しの要請があった。中には、どんな学習内容になっているかを知り、授業にも生かしたいということで小学校籍の先生が中学校用教科書を、中学校籍の先生が小学校用の教科書を借りていくケースもある。

ただ、今年度は上記のような理由から多くの学校に利用していただいたが、来年度以降も同様に利用があるとは限らない。この点をどうしていくかが、課題である。

【今後の取組案】

より多くの方に利用していただくために、年度初めのお知らせだけでなく、機会のある際には通信等で情報発信していくことも必要だと考える。

８．その他の取り組み

（１）研修会

【実施時期】

期　　日	内　　容	備　　考
４月 10 日	高岡地区市町村教育委員会連合会（定例総会・部会総会）	須崎市民文化会館
５月　１日	第１回　教育支援センター連絡協議会	高知県教育センター分館
５月 11 日	第１回　高知県教育研究所中西部地区連絡協議会	須崎市総合福祉センター
５月 22 日	高知県教育研究所春季連絡協議会	高知県教育センター分館
６月 12 日	第１回　教育相談講座	高知県教育センター分館
６月 19 日	第３回　高岡地教連　教育支援部会	中土佐町文化会館
７月 １日	高岡地教連　学校教育部会　県外視察研修（高松市）	高松市立第一小学校 高松市立玉藻中学校
７月 10 日	四万十町教育研究所視察研修	土佐市教育研究所
８月 19 日	第４回　高岡地教連　教育支援部会	四万十町役場
８月 25 日	四万十町研究主任会（小中学校）研修会	四万十町役場
10 月　２日	ＳＳＷ活用事業　ブロック別協議会	四万十市中央公民館
10 月　６日	第２回　教育相談講座	高知県教育センター分館
10 月 29 日 ～ 31 日	四万十町教育委員会視察研修（福井県）	福井市教育委員会 福井市立安居中学校 福井市立順化小学校
11 月 10 日	第２回　教育支援センター連絡協議会	高知県教育センター分館
11 月 12 日 13 日	高知県教育研究所秋季連絡協議会	田野町立田野小学校 田野町ふれあいセンター
11 月 17 日 18 日	高岡地教連　教育支援部会　県外視察研修（徳島・香川県）	徳島県発達障がい者総合支援センター 琴平町社会福祉協議会
11 月 20 日	ことばの力育成プロジェクト推進事業　研究発表会	窪川小学校
11 月 24 日	第３回　教育相談講座	高知県教育センター分館
12 月 17 日	四万十町教育研修所　所内研修（松井カウンセラー）	農村環境改善センター
12 月 25 日	ＳＳＷ活用事業第２回連絡協議会　ＳＣ・ＳＳＷ合同研修会	サンピアセリーズ
１月 21 日	第４回　教育相談講座	高知県教育センター分館
１月 22 日	ＩＣＴ絆プロジェクト事業　公開授業協議会	十川小学校
１月 25 日	四万十町研究主任会視察研修	越知町立越知小学校
２月　９日	四万十町研究主任会視察研修	越知町立越知中学校
２月 10 日	高岡地教連　教育支援部会	土佐市中央会館
２月 15 日	小小・小中連携推進協議会　実践交流会	四万十町役場

（２）所内会・全体会

【実施時期】

月・日	会の種別	場　所	月・日	会の種別	場　所
4月6日	全体会・所内会	改善センター	11月 4日	全体会・所内会	改善センター
5月8日	全体会・所内会	改善センター	12月11日	全体会・所内会	改善センター
6月5日	全体会・所内会	改善センター	1月 4日	全体会・所内会	改善センター
7月8日	全体会・所内会	改善センター	2月8日	全体会・所内会	改善センター
9月7日	全体会・所内会	改善センター	3月25日	全体会・所内会	改善センター
10月 2日	全体会・所内会	改善センター			

【目的・概要】

所内会では、研究員の研修や研究、教育支援センターの運営等の報告を行い、情報の共有化を図るとともに各事業に対して検討を行う。所長が少年補導センター所長を兼ねており、少年補導センターを含む全体会と所内会を月１回開催している。

【成果と課題】

全体会は定期的に開催できた。全体会で話し合う大まかな内容は、以下の通りである。

日程	全体会の流れ
9:30～10:30…少年補導センター会 10:30～11:00…全体会 11:00～12:00…研究所所内会 ※兼務である所長が全ての会に参加するため	１．月行事の確認 ２．所内報告 ３．今後の取り組み ４．その他

所内会では教育研究所内の各事業の検討や情報の共有化が図れた。特に教育研究所と教育支援センターとは場所も離れていることから、通室してくる生徒の様子や状態を全体で把握するのに所内会は大きな役割を果たし、教育支援センターの運営についての支援策を考えるうえで効果があった。また、教育相談活動においても、事例検討ができ役立っている。

【今後の取組案】

月１回の所内会を原則とし、教育研究所内と教育支援センターの活動についての意見交換を行い、今後も情報の共有化を図っていくこととする。その中で各事業の検討を行うとともに、教育支援センターの円滑な運営に向けての支援策を考えていくこととする。

（３）町内めぐり

【実施時期】

８月１８日	四万十町内外教職員（１０名参加） 改善センター → 五社（宝物殿） → 高賀茂神社 → 一斗俵沈下橋 → 道の駅「四万十とおわ」→ 無手無冠 → 半平旅館 → 改善センター	大正 十和 窪川方面

【目的・概要】

四万十町の自然や歴史を知ることを通して、地域に対する理解を深め、地域を愛する心を育むことを目的として実施した。対象は、今年度四万十町小中学校転入の教職員及び希望する教職員とした。また、教育研究所中西部地区の研究所へも案内をし、参加していただいた。参加者が少ないということで中止となっていたが、一昨年度再開した。四万十町に勤務している教職員の方に少しでも地域を知ってもらうことが一番のねらいである。四万十町内は広範囲に及ぶために、校区外の地域については、普段なかなか見学する機会も少ない。

そこで、１日の見学では巡回できる場所に限界はあるが、大正・十和・窪川地区をそれぞれ見学できるようにした。また、各地域の詳細については、四万十町内の自然や施設に詳しい池田　十三生さんを講師にお招きして説明をして頂いた。

【成果と課題】

１０名の参加で、計画していた行程を見学することができた。参加者からは、大変好評で、講師の方の説明もあって良かったという感想が多かった。１日では見学できる地域が限られることが課題であるが、行程がマンネリ化しないよう工夫していく。

（参加者の感想）

○見学地の選定や日程編成等よく考えられていたと思います。神社、沈下橋など町内には数多くの歴史的文化遺産があり、直に見ることができたことで印象に残りました。特に印象に残ったのは無手無冠です。会社の方からの行程の説明の中でも、特に日本酒作りのコンセプトに感銘を受けました。生徒たちにも聞かせてあげたいと思います。

○I had fun on the tour. My favorite place was the 5 shrines（五社）We went to first. I liked the old swords and other things. I love the Toowa みちのえき. It is one one of my favorite places in 四万十町. Thank you!

【今後の取組案】

来年度以降も継続して取り組んでいきたい。

（4）教育研究所だより「しまんと」

【実施時期】

第18号　　7月21日発行

第19号　　3月18日発行（予定）

【目的・概要】

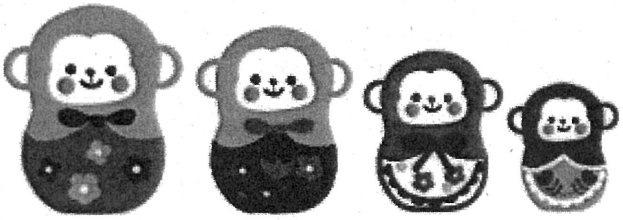
昨年度に引き続き、教育研究所が持っている情報を各学校に発信する手段として、教育研究所だより「しまんと」の発行に取り組んでいる。町内の教職員、教育研究所運営委員に一人1部ずつ配布している。今年度も、各学校の取り組みや、研修で行なったことを知らせることを中心に紙面づくりをした。

【成果と課題】

研究所の活動や取り組みだけでなく、町内外の学校の取り組みを紹介できたことはよかったと感じている。情報は少しではあるが、県外の先進校の様子も紹介できた。学校で視察を検討していると、担当の先生から問い合わせもいただき、関心を寄せていただいていることを嬉しく思う。ただ、年間の発行が2回と、情報を発信する手段としては少なくなってしまったことは課題である。今後は、ページ数が少なくても、回数をできるだけ増や小まめに情報を発信していけるよう取り組んでいきたい。

【今後の取組案】

研究所の取り組みをより詳しく知ってもらうためにも、上記の課題でも述べたように、もう少し情報の発信を小まめに行っていきたい。



平成２７年度 四万十町教育研究所スタッフ

所　　長	戸田　晶秀
研 究 員	市川　雅美
ドクター	澤田 由紀子
教育相談員	伊賀　修　宮﨑　正行
教育支援センター指導員	下谷 良一　土居 裕子　山﨑　一
スクールソーシャルワーカー	上田 美佐江　土江　薫
事 務 員	下元　美和

平成２８年３月８日